

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
たきかわ たつ お 瀧川 辰雄	男 性	3 8 歳	新城市平井 (一畝田)

「旧満州国東三河郷開拓団顛末記」

参考文献 「この足で故国の土を踏みたい」 昭 5 1 年発行

「愚かなる者の旅路」 昭 6 2 年発行

「平和の礎Ⅱ 死線を彷徨いて」 平成 1 0 年発行

掲載写真：「東三河郷開拓アルバム」等より

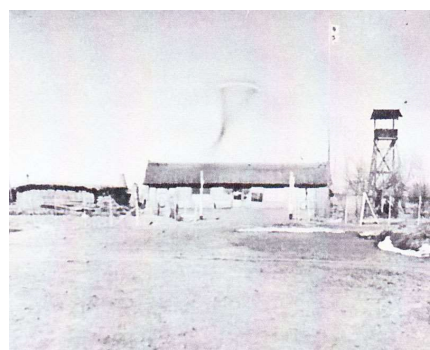
私たちは、敗戦国の棄民集団だったことをいやと言うほど思い知らされた。改めて戦争の大きな歯車が、いかに犠牲を強いるか、私たちは忘れない。こんな悲劇を二度と繰り返すべきではないと心から訴えたい。2 0 6 人のご冥福を祈りながら。

○ 最初の入植地は湿地帯

昭和 1 4 年 6 月 4 日、敦賀港を出港する移民輸送船気比丸で、私は満州開拓団愛知県第 9 次東三河郷建設基幹先遣隊 2 0 人の一人として渡満した。そして第 5 次永安屯開拓団で約 9 ヶ月間の現地訓練生として、木村直雄団長らから指導を受けた。当時の訓練生の月給は 1 円であった。今も語り草であるが、山鳥の雄が 1 羽 1 円で買えたから「雄 1 羽、月給の味、おわりけり」と言って笑い合ったものである。とにかく安い月給だった。

昭和 1 5 年 2 月 1 1 日、いよいよ甘南県平陽鎮地区に入植することになった。興安省と竜江省の境界の大平原の 1 0 か所に開拓団（3 千戸、1 万 5 千人）を入植させ、5 年間で 1 万 h a の一大農業楽園地帯を構築する計画である。愛知県は 1 開拓団 3 0 0 人を送り込んだ。現地は満人部落が点々とある所で、本部指定の満人家屋が接収されており、家屋の屋上に日章旗をひるがえし、開拓の第一歩を記した。

しかし、この年は 6、7、8 月と雨続きで、耕地は泥沼のような有様で、川が氾濫して農作物を流出させてしまった。作物の収穫は皆無の状態で、失意のうちに過ぎた。



東三河郷開拓団本部

○ 家族召致

先遣隊から家族召致をというので、7 月には第一陣として夏目正夫君、富雄君兄弟、片桐芳二君、鈴木太一君、白井出海君等が家族を連れてきて、開拓地に和やかさが出てきた。しかし、先遣隊の団員の中には、「家族を飢え死にさせたくない

い。」と日本に帰る騒ぎもあった。田中政治、馬場藤吉、生田惣次郎、庄田喜一郎、松井春雄、白井彦咲、山本林三の7名が家族の召致に帰ったまま戻らなかった。それほど水害による失意の落伍者というハンディを背負ったのだった。

昭和16年、洪水防止のために零下40度の中を6頭引きの大馬車で、拉哈駅まで64キロの道を建設資材を運搬して改修工事をしたが、この年も長雨続きや冷害で満足のいく農作物は収穫できなかった。2年連続の水害に失望して団を逃げ出す家族も出る始末だった。

しかしその後、高台地にある満人所有の耕地、500町歩の買収を満州拓殖公社と関東軍に働きかけ、買収に成功し、その後は順調に農作物が収穫できた。昭和18年には全満開拓団中3等という食糧増産供出で、関東軍から表彰を受けるほどになった。これからは日々前進あるのみだ。開拓団員一同、もう大丈夫とひと安心し、明日への希望に火と燃えたのだった。

○ 召 集 令 状

昭和20年8月14日、召集令状が28通、団本部へ届けられた。我が団への最初の召集令状は昭和19年頃からであり、開拓団全戸数146戸のうち80余戸、120余人が既に召集され戦場へ旅立っていた。ところが昭和20年になるとひっきりなしの召集令状で、どこへ行くともなしに男は消えていくばかりだった。8月14日には、『8月17日、チチハル軍司令部へ入隊すべし』という通知が男という男にあり、後に残った男は15歳以下と39歳以上の40人あまりで、私は目が悪くて兵隊検査で丙種不合格の兵役免除者だったが、それでも召集令状が来たのである。

それまでは秘密裡に立ち去るように開拓団を出ていたが、今回は日本の敗戦が満人たちにも知られているということで、盛大な送別会をやるべしと決定した。宴まさにたけなわの時だった。誰からともなく静かな歌声が流れ出る。

「ここはお国の何百里、離れて遠き満州の赤い夕陽に照らされて、友は野末の石の下」

合唱は、次第に大きく低く悲しく、歌に託す

女性たちの心の底をゆるがす悲痛な叫びであった。大陸の若い花嫁たちの淋しさ、悲しさ、やるせなさを押し殺しての心のつぶやき。子どもたちも私たちも歌に合わせた。どこにもぶつけないところがない心の奥底を歌声として……

突然、部落の最長老の夏目正夫さんのお母さんが引きつけを起こした。歯を食いしばって、ヒーヒーヒーという声にもならない声を出して、若い女たちの間に何ともいえない悲痛な混乱が起きた。こらえにこらえた心の堰は切られた。嗚咽



朝 拝

となり、号泣となり、大きな波のうねりとなった。無理もない。夏目正夫さんは早ばやと出征し、今度また弟の富雄君の所へも召集令状が来たのだ。11人もの女子供を抱えた二人だけの男が二人とも召集されたのである。老母の心の内はいかばかりだったろうか。

召集を受けた私たちが、平陽鎮開拓本部に集合して情報を聞いたところ、日本が無条件降伏をしたという情報が流れていた。しかし、真偽のほどははっきりせず、軍司令部からの解除命令がないので帰るわけにもい

かない。ラハ駅まで行くことになり、行程30キロを進んだ。甘南10地区開拓団の連絡所で所長をしている本願寺布教師、一色覚順師に会って指示を請うた。

今君たちがチチハルへ行けば、一戦も交えずソ連の捕虜になりに行くようなものである。ここからすぐ開拓団に立ち帰って団の対処を考えなさいとのことである。私たちが開拓団のため、真剣に働いてくださった一色先生は、進駐してきたソ連兵のため、銃殺されたということを後で風の便りとして聞いた。



昭15 甘南県付近 中央滝川氏

○ 無抵抗主義

私たちは28名は東三河郷開拓団に帰り、さっそく40人あまりの男が集合し、無条件降伏後の対中国人対策や今後の防衛、家族を今後どのように守るかなど、いろいろ相談した。開拓団に残る女子と子供は400人あまり、一体どうしたら守っていけるのか、ソ連軍の侵攻も間もないのだ。

付近住民の話ではソ連軍はどう猛無惨で、少しでも抵抗するとピストルで射殺される。満人からも蛇蝎（ヘビとサソリ）のように思われているのだ。私たちは部落長会議を開き、一にも二にも無抵抗主義をとり、一人でも多く日本に返すことが私たち男の至上命令だ、どんな悲しいことが起こっても家族集団を守ろうと、かたく誓い合った。

8月下旬には土地管理係の夏目幸夫団員が、土地を接収された満人に惨殺された。この件では復讐計画がもちあがった。私は必死に引き止めたが無視され、結果として17人が警察に拉致され、数名が射殺された。この危機は賠償を覚悟して満人の有力者に頼みこみ、何とか許されることになった。

○ ソ連兵来団

9月15日、甘南県10個集団（開拓団）支配のソ連軍司令部が、東陽鎮に置かれた。そのソ連司令官が、部下を大勢連れて、初めて東三河郷開拓団へやってきた。命綱ともいふべき鉄砲も拳銃も日本人の魂として大切に持ってきた日本刀も、すべて提出すべしとの命令があった。日本馬も同様だ。開拓民にとっては

最も頼れる愛の絆ともいえる日本馬とは涙涙の別れとなった。

ソ連兵に乱暴されては困るので、彼らを接待すべく羊を殺して料理を作り、支那酒を買い求めて歓待した。ソ連兵の服装は、背広服、詰襟服、菜葉服あり、靴は短靴、ブック靴、ゴム靴というようにまったく粗末な服装で千差万別、これが兵隊かと疑うほどだった。ところが、どの兵士もマンドリン銃や拳銃を肩にした装備の完全な兵隊だった。兵士たちは実に無邪気で、団の子どもたちと遊びたわむれていた。会食が始まり酒が入り始めた頃、一人の兵士が団員の奥さんの手を取って室外へ連れ出そうとした。私は必死に司令官に頼んだが、拳銃を一発発射された。弾は私の胸をわずかにかすめただけで、何とかこの日は無事に終わった。

東三河郷開拓団を守ることは不可能になった。匪賊たち、満人集団の襲撃や略奪は相次ぎ、ソ連の兵隊たち、満州国の公安隊、自治委員会と代わる代わるの強制訪問があり、そのたびごとに本部の物品はもちろん、各部落も次々と荒らされた。食べ物もほとんど強奪されてしまった。

老人、幼児の多いわが団、400人あまりの大世帯でチチハルまで避難するとなると、ここから200km、そんな大勢での移動は不可能だった。家族には病人あり、老人あり、妊婦あり、生まれたばかりの幼児もいる。私の妻は当時28歳、11歳を頭に4人の子持ちで、その上妊娠8ヶ月の身重の体だった。長女は3歳で満州風土病のクル病にかかり、重度障害児だった。

9月頃、私は10個団の各開拓団を見て回ったが、ほとんどの団は匪賊の襲撃やソ連兵の侵略で多くの団員が殺され、あまりにも悲惨すぎて本当のことを書けないほどだ。私たちは東に20キロ離れた、まだ無傷だった熊本県出身者の東陽開拓団へ移動することになった。



開拓地の様子

○ 東陽開拓団へ

昭和15年に大きな希望と夢を抱いて入植した東三河郷開拓団を去るわけだが、日本から運んだ農機具やいろいろな機械類から牛、豚、鶏までありとあらゆる物は全部持ち去られ、6年間で築き上げた開拓地は廃墟と化している。何のための苦しい大地の闘いだったのか、北満の10月中旬旬といえば、零下の大地は凍りつき、折からの厳しい北風は粉雪を運んでくる。

2台の大車に幼児と老人、妊婦を乗せ、1台の大車には140余戸の全財産を積み込み、男たちは前後を囲むようにし、希望、夢、執念、喜びと悲しみが渦巻く三合屯の地を立ち去った。

団員とその家族合わせて406人は、匪賊の襲撃におびえながら東陽開拓団に

着いた。東陽開拓地は一度も匪賊の襲撃を受けたこともなく、ソ連兵の侵攻^{しんこう}もなかった。着の身着のままで食料もない私たちに、村田勝東陽開拓団長等は、心からのもてなしをしてくれた。

私たちは東陽開拓団学校を宿舎に、5教室に分かれて共同生活が始まった。しかし、金なし、物なし、食糧^{しよくりよう}なし、布団も毛布もなし、すすのおカユもない生活だった。それでも毎日のように受けていた襲撃から解放されたのが何よりありがたかった。東陽開拓団にジャガイモはあったので、粟^{あわ}を買い受けてジャガイモに粟を入れて炊くという有様だった。健康な者は毎日、満人の家に働きに出た。

12月のはじめの頃^{ころ}、毎日のようにさらさらとした粉雪に見舞われて零下40度を越える日が続いた。戸外に出ると風雪^{ふうたお}に吹き倒されそうになるほどだ。60畳^{じよう}ぐらいの教室に80名ぐらいの人がいたが、板敷きで敷物^{しきもの}は何もない。誰もが下着の替えもなく、教室の中でひしめいている。女たちはストーブの近くでシラミ取りが仕事になった。1日で250匹^{ひき}とか200匹とか言っていた。



入植者家族

○ 子どもたちの死

食糧^{しよくりよう}も不足して一部屋（80人ぐらい）に対して、ジャガイモ5kg、粟^{あわ}2kgほどで1食という状態が続くようになった。大人たちはほとんど粒物^{つぶもの}は喉^{のど}を通らない。せめて子どもたちはと心をくばるので、ますます栄養失調は深く、刻一刻と生気がなくなり、死^{きよう}の恐怖^ふに負けてしまうようになる。夜が明ければ、どこかの部屋で栄養失調で死んでいく。今日も凍りついた大地を、かちんかちんと掘り起こして亡骸^{なきがら}を吊^{とむら}う。

私の三男の浩久^{ひろひさ}、当時1歳3ヶ月も栄養失調と流行^{はやり}始めた発疹^{はっしん}チフスで、「お母さん、水、水」と絶えず水を飲みたがりながら息を引き取った。妻は臨月^{りんげつ}の身重で、大きな腹^{はら}を抱えながら浩久のため夜も寝^ねずに世話をしている。しかし、医者はなし、薬はなし、ただオロオロするだけでどうしようもないのだった。わずか5、6日病んだだけで死んでいった。

こんな中でも妻は自然の摂理^{せつり}で11月29日、男の子を産んだ。四男克久^{かつひさ}だった。産婆^{さんば}さんだった奥^{おく}さんに取り上げてもらった。親子とも無事でほっとしたが、こんな時だけに祝福されざるこの世への誕生^{たんじよう}、思えば不憫^{ふびん}な子である。私は心を鬼^{おに}にして満人にくれてしまった。それは、三男が死んだ直後でもあり、長女が立つことも話すこともできず、世話^{じやうぶ}のやける子どもだったこと、妻も無理に無理を重ね、丈夫な体ではなかったからである。妻は反対したが、私は妻も子どもも生か

す最良の方法であると信じた。預けたのは東陽鎮^{とうようちん}の住人の満人で、かわいがって育てられていた。度々克久^{かきく}を連れて面会^{めんかい}に来てくれたが、生後6ヶ月ほどで死んでしまった。私は妻と可哀想な克久のために亡骸^{むがい}を弔った。

○ 栄養失調^{えいようしじょう}と発疹チフスの死

団員と家族は、栄養失調^{えいようしじょう}や発疹チフス^{はっしんちふす}、それに猛烈^{もうれつ}に繁殖^{はんしよく}するシラミ^せに攻められ顔は青白く、頬^ほはこけていった。やせ細った手を差し伸べて、「日本へ帰りたい。死にたくない。」と涙ぐみながら、かすかな声で訴えながら死ぬ人が、12月から21年2月にかけて、厳しい零下40度の寒さも手伝って、毎日のように死者が出た。高熱でも布に氷を包んで冷やすのが精一杯で、他には手の施^せしようがなかった。

○ 東陽開拓団集團生活の結末

2月ごろより発疹チフスも下火になってきた。この時分は食べるものも塩もなくなり、共同生活も終息の時となった。生きるためには少数に分裂^{ぶんれつ}するより外なかった。

どうにか達者になった男たちが親しい人を連れ立って行った。元の満人苦力^{クーリー}の家を頼る人、チチハルへ行きたいと出かける人、ラハをめざす人もいた。私は三合屯の親しい満人に誘われ、40名あまりで5ヶ月ぶりに三合屯へ戻った。

旧友の満人たちは皆親切で、いろいろと食べ物を持ってきてくれた。満人学校の校長先生は、そのうち日本に帰れるようになるから、それまでここにいれば、食糧^{しょくりょう}ぐらいは何とでもする、5月になったら一緒に農業^{いっしょ}をやりたいと、心から慰めてくれた。しかし、わずか4日後には、国民党の兵隊が三合屯に宿泊し、宿舎^ふへ踏み込んで女たちに乱暴^{らんぼう}しようとしたため、東陽鎮へ移動した。

東陽鎮には初めて居住したが、この東陽鎮城内には開拓団落ちの日本人が70名ほどいたようだった。そのうち、日本の少しでも近いところへ行きたいと若い連中が言うので、チチハルまで送ることにした。チチハルまでは160km、この若い連中が無事チチハルへ着けるようならば第二隊、第三隊と送出して自分が最後に行けば、自分の意志^{いし}を遂行できると考えた。

それはぞろぞろと乞食の行列のようで、夜になると道ばたの部落へ行き、宿泊を頼み込み、その上夕食を食べさせてもらった。何の見返りなしに、昼食の弁当をもらった。断られた部落もあったが、ほとんどの部落で快く接待してくれた。中には子どもがかわいそうだと、小遣いまでくれる満人もあった。開拓団は、満人の世話になりっぱなしで南下したのだった。日本兵はいけませんが、おまえたちは農民だ。農民が困るのを俺たち農民が見捨てては申し訳ない、と言って世話をしてくれるのだった。時の政府の保証も村の保証もないのにこれだけの親切、日本であつたらどうであろうか、おそらく日本ではできない親切であろう。

こうしてチチハルへ2kmばかりの所までたどり着き、私は東陽鎮へ戻った。第二陣は、夏目富夫君一家4名、夏目正夫君家族7名、橋本義一君一家8名等、合計20余名、5家族を送り出すこととした。

○ チチハル・吉野屋・収容所・病人見舞い

東三河郷開拓団から南下した人たちは大部分がチチハルの吉野屋難民収容所へ落ち着いていた。この吉野家も決してよいとはいえなかったらしい。発疹チフスが蔓延していた。次々と死んでいく者、病気になる者、目も当てられぬ有様との話に、何とかせねばと思い、見舞いに出発した。

ようやくチチハルに到着、吉野屋難民収容所の本宮部落員のいる部屋に面会に行った。この部屋は伝染病室になっており、同じ東三河郷開拓団の人たちも見向きもしない部屋だった。ここで内地への帰還を一日千秋の思いで待ち続けたであろうに、発疹チフスの蔓延に栄養失調で、部屋にいる人たちで起きている人は一人もいなかった。夏目富夫君も橋本義一君も死亡した後だった。夏目富夫君、正夫君2家族は5名死亡、橋本義一君一家は、8人中克己君だけ生存7人死亡、橋本さん夫婦は1時間のうちに夫婦が死亡したという。40名いたうち24名もの犠牲者が出ていた。しかし、発疹チフスもほとんど峠を越えていた。

○ 帰還命令

昭和21年8月22日、「日本人、日本への送還のため東陽鎮を午前6時出発す」という通知書が共産党東陽鎮駐在司令部区長より連絡があった。引き揚げが開始されることは予想されていたが、現実には通知を受け取ると大騒ぎである。午後4時頃の通知で、翌早朝6時に出発、あまりに突然過ぎて、付近にいる日本人たちに連絡するのが大変だった。通達は、本人の意志を尊重すること、他人が強制的に引き留めることはできない。中国人部落へも同様の通達が出された。

この帰国命令を受けた時は、東陽開拓団に亡命した時の406人が200人に減り、206人は夢にまで見た故国の土を踏むことができなかった。夫が死亡して帰国しても生活の見通しがつかないとのことで、残留を希望する家族もいた。満人の世話になった人は、泉のようにわき立つ心とお世話になった恩の狭間で心が揺れ動いたに違いない。私たちに別れを告げに来たはずなのに、急に「日本へ連れて行って。」としがみつく人もいた。

23日朝、共産党区長の計らいで思いもかけず6台の大輪（ダーチャ）に乗り、兵隊を10名つけて送ってくれた。共産党区長の厚意に深く感謝するのみだった。

○ チチハル着 8月25日

チチハルに到着したときは、東三河郷開拓団関係者が出発した後だった。いっしょに南下できないのが残念だった。皆はチチハルまで行けば再会できると期待

してただけに、がっくりと腰を折られた感じだった。しかし、東崗屯方面から関谷団長が30余名を引き連れて到着、平陽鎮地区開拓団家族が続々とチチハルに到着した。疲労の色こそあれ、どの顔にも待望の故郷への帰還という喜びに満ちていた。しかし、服装はどの人を見ても乞食以下で、匪賊の襲撃の激しさを物語っていた。この



当時のチチハル市街 「満州国の興亡」より

集団の中には、親に死なれた子供、かわいい子供に死なれた親、夫の妻の兄弟のと、病死、栄養失調での死、銃殺による死、誰もが死の影を背負わない人はいない状態だった。

ハルピンまでは共産党の治下となっており、汽車も客車に乗せてくれた。共産党の治下の間には何かと親切で、私のような病人もよく診察してくれ、薬も投与してくれた。松花江を境として国民党の治下となり、長く汽車に閉じ込められた。

○ 新京にてDDTの威力をみる

ようやくのことで新京到着、収容所に入った。ここでDDTの徹底的消毒を受けた。頭の上から足の先までDDTのもろかぶりという徹底した消毒だった。3日間の滞在中に、シラミは1匹もいなくなった。

そこで話を聞くと、ある開拓団は幹部が真っ先に青酸カリで自殺し、ある開拓団は全員終結して周囲へ薪を積み、ガソリンを掛けて火をつけて自殺したとか、団員家族を連れ避難の途中、満人に襲われて対戦中、銃火の中で戦死というように開拓団関係の人たちの悲報をいくつも耳にした。身震いのような悲惨な有様だった。戦前、戦中、あれほど一般庶民に対して権力の限りを振るった軍隊も、終戦直前には満州在住一般民をあたかも犬猫を捨てるようにして去り、振り返りなかった軍隊という名の為政者。そのため、親子離ればなれになり、ある者は自決し、ある者は匪賊に銃殺され、300余名もの一団を自決にまで追いつめた軍隊の罪、これこそ万死に値する重罪である。国家を経営する者の考えや如何。

○ 新京からの輸送について

開拓団出身者ばかり2400人あまりが一団となり、無蓋貨車に乗せられた。女子供を真ん中に入れて、互いに体を寄せ合い、振り落とされるのを防ぐという状態だった。雨が降れば頭からずぶぬれのまま、用便をしたくても貨車は止めてはくれない。本当に不親切の極みだった。

昼間はひたすら走り続ける貨物列車も、日が暮れると必ず止まり収容所へ入る。誰もがぺこぺこに腹をすかし、前の難民が残した物をさがす。少しでも食べられ

るものが目につくと、一斉に飛びつく、まるでこの世ながらの餓鬼道である。

一般市民の引き揚げ者の宿泊した後には残飯もあり、配給された高りゃんが麻袋にそのまま残っている。薪も残っている。一般市民の引揚げ者には配給高りゃんなど食べられないのだ。彼らには金もあれば物も持っているので、宿舎の配給高りゃんなどそのままにして銀飯を炊いて食う。町へ出ていろいろと物を買って食う。私たち奥地開拓団引揚げ者にはそれができない。いやそういうことを誰でもがやりたいが、金なし物なしではできないのである。

最後の宿泊地錦州ではいよいよ明日は乗船だ。船に乗れば高りゃんなぞ持って行っても仕方ないからと、他の中隊に渡した。

○ 故国に立つ

帰還命令が出て東陽鎮を出発したのが8月23日、佐世保へ上陸したのが11月3日、懐かしの故国日本の土を確かにこの足で踏んだ、踏みしめた。その喜びは格別だった。日本の港も山も木も川も変わっていない。我らの祖国は健在なのだ、よかった。帰ってきて本当に良かった。同士たちの喜びの顔、うれしさいっぱい涙の笑い、そこにはこれまでの苦難、困難を極めた北満州での数々の苦しみ、軍隊を憎み、祖国に怒り、匪賊の襲撃に身震いし、肉親の悶死に悲しみ、はかなく散っていった同士にかわって恨みを思い切り祖国へたたきつけてやろうなど、いろいろな思いを胸に秘めた我々だったが、祖国の土を一步踏んだ瞬間、一切の思いは消え失せた。純真で清らかな気持ちで喜びにひたるのだった。

11月9日、国鉄飯田線新城駅に降り立った私の家族は5人、親友小林宗一君家族6人の11人である。新城駅前広場は昔と少しも変わらない。終戦後の苦難に絶する道を歩み続けたことを思う時、こうして郷土の土を踏めるなんて夢にも見ることはできなかった。なつかしい古里の土、一步一步踏みしめる。何という心良い感触だろう。一種独特な感覚が次第に胸の内にあふれてきた。よくも無事に帰ってきたものだ。数年前、晴れやかな旗の波の中を満州への出発風景が、ふと心のどこかをかすめる。小林宗一君の本屋の小林清吉さんが迎えに来ていた。私の家からは誰も来ていない。愛知県庁で電報を一鍬田柄杓沢の妻の実家へ打っていたが、誰も姿を見せなかった。私の兄妹たちも一鍬田へ疎開しているであろうに、誰も顔を見せない。まったく、”招かざる貧客満州より来る”である。私も妻も、心の中に何ともいえぬ寒々としたすきま風が吹いて通るのだった。

(以下略)



上陸の喜び 飯山達雄著「引揚げの慟哭」より